

5. 協力体制での活動

計画・実践・評価のサイクル的な教育活動を学年、あるいは学年団を基盤として、協力しながら継続的に行なうことである。

計画、すなわち単元指導計画は、学級担任による教育の長所を残しながら、教師の特性を生かした役割・分担により、集大成の教育効果を期待できるようにする。

教材構成にあたっての教材研究は、制約された時間内で、特に協力して行なうことからして、基本的な構想について、共通理解と徹底をはかっておく必要がある。

その一例をあげれば、基本的観念・あるいは大意である目標を細目として提示し、細目に即して内容を段階的にとらえ、各段階で評価事項を予測する。こうした手続きから児童の発達段階、経験に応じて調整し、主体的に消化しやすいように教材構成をすることである。

教材研究が、基本的構想により共通理解のもとに進められて、単元指導計画を作成することになるが、与えられた時間で作成するため、骨組みとしての基調案を作成することになる。その作成はチーム・リーダーが行なうことになろうが、時にはチーム・メンバーの合議によって作成されることもある。いずれにしても単元指導計画の作成に時間的な余裕（1週間内外）をもたせることである。

基調案は、教材の段階的配列、教師の役割・分担、時間配当、集団の形態などを示すものである。この基調案により、各メンバーは内容などの検討とともに、必要な資料を整え、分担内容を具体化したものを持ちよって、単元指導計画の作成に入ることになる。

単元指導計画については、教授過程と併行して、教師の役割・分担、集団の形態を考えることになる。教師の役割・分担は、1時間単位、あるいは教授過程の段階ごとにTL（主となる教師）、ST（専門的に協力する教師）の立場を受け持つことである。その立場は固定したものとは考えないようにし、ともに主体性を尊重するようになりたい。

集団の形態については、大集団（2学級以上の合併）、中集団（単位学級程度）、小集団（1学級の $\frac{1}{2}$ 以上の分割）に再編成することである。教師の役割・分担とのかかわりあいには、一般的にみて、問題は握や「まとめ」の段階は、大集団による教師の協業が考えられるだろうし、理解や「たしかめ」をはかる段階では、特に個別化の配慮が必要なので、小集団による教師の分業が考えられるだろう。

検証は、実験学校2校で行なったが、今回は、小規模少人数学級校における検証のあらましをあげることにした。

6. 低学年体育の検証

(1) 研究のねらい

この学年においては、各種の運動をとおして、調整力を養うとともに、運動をするときのきまりを守って、安全に運動を行なう能力、態度を養うことをめざしている。

そのためには、ある程度の集団性を考えなければならぬ。本校のように、小規模少人数学級校においては、集団性を養い、行動力を高めるためには、2学年合併による授業をとり入れる必要があると思われる。

研究のねらいを、具体的にあげると次のようになる。

- ① 学年のわくをはずした集団編成による授業過程を確かめる。
- ② 教授過程で、段階的に教師の役割・分担を確かめる。

(2) 題材名 ふみこし、のりものごっこ。